退官者のひとこと

退官にあたって

毛利光 俊彦さん

昭和50年に入所して31年の歳月が流れました。最初の配属先は平城宮跡発掘調査部考古第一調査室で、部長が鈴木嘉吉氏、室長が町田章氏、室員には沢田正昭、佐藤興治、黒崎直、菅原正明、山本忠尚らの諸氏がいました。

当時は、新入所員が朝一番に来て、部屋の清掃をし、お茶を出すのが役目の一つでした。木製品などの整理や実測の手解きを受けるとともに、部屋での研究会に参加し、夕方からは酒宴もあって、次第に研究所の一員になっていきました。

入所３年目に考古第三調査室に配属となり、以後、瓦との縁が続いています。内裏の報告書や法隆寺昭和資財帳で、瓦談義に華を咲かせたことが、今も楽しい思い出となっています。この途中で、考古第二調査室に移り、土器の世界も知りました。平成７年には長屋王邸の報告書を編集しましたが、その刊行は研究員諸氏の努力とともに、部長（町田章氏）の度重なる催促・指導に負うところが大でありました。

翌年、入所21年目にして、平城宮跡発掘調査部を離れ、飛鳥・藤原宮跡発掘調査部に配属となり、新天地での発掘調査や研究に７年間を過ごしました。山田寺の報告書編集に没頭したことも今、思い返しています。

平成16・17年度はキトラ古墳に関わり、最後のこの１年は埋文センターで地方公共団体の職員に対する研修などに関わってきましたが、次第に退官を意識し、寂しい思いが日々深まっています。

先輩諸氏や御同輩、そして発掘調査や研究を支えて下さった作業員、補佐員、アルバイト諸氏に、研究所での楽しい生活をありがとうと、心より感謝申し上げます。

（埋蔵文化財センター長　毛利光 俊彦）